

# 平井宜雄先生を偲ぶ

弁護士 染谷 隆明（平成20年度修了生）

去る平成25年11月26日、平井宜雄先生はその生涯を閉じられ永眠されました。専修大学法科大学院（以下「本学」という。）において平井先生から指導を受け、影響された学生の一人として哀惜の念に堪えません。私個人における平井先生に関する思い出を綴ることにより平井先生を偲ぶこととしたいと思います。

## 1. 平井先生の講義の思い出

平井先生は、本学において、「現代契約法」、「民事責任法」及び「法政策学」の講義を担当されていた。各授業に格別の思い出があるが、紙幅の制約及び私自身の現在の関心から、「法政策学」の思い出を綴ることとしたい。

「法政策学」は、解決すべき問題を発見し、その解決のための代替案を列挙して、それらを一定の基準で評価し、その中から「望ましい」代替案を選択し（または優先順位を付し）、それを立法へと結びつけることが可能なように、意思決定者又は政策決定者に助言するための一般理論の伝達を目的として開講された講義であった。

「法政策学」では、法律学の思考様式である法的思考様式を学ぶ他、経済学、組織論、経営学、社会学などの隣接科目における意思決定論が法的思考様式に適合するか検討する必要があるため、これらの隣接科目を学ぶ必要がある。平井先生は、講義の中で「法律家は法律家である前に教養人でなければなりません。」「問題を発見する能力は法律家の能力の中でも最も評価すべき能力です。問題発見能力を養うにはあらゆるものに関心を払わなければならないのです。」と繰り返し述べられ、上記の隣接科目はもとより、南イタリアのギルド社会の特徴、中国における規範の意義、中東における取引市場の特徴、戦時中レーダーが開発された経緯、西洋宗教史、西洋音楽史等の幅広い分野の談話をなされた。平井先生の講義は、法律学のみへの関心に偏りがちな学生の潜在的な知的好奇心を刺激させるものであった。法律学以外の勉強をしたことがなかった私にとって、「法政策学」の講義は相当の負担であったけれども、隣接科目の意思決定論に係る知識を法律学に帰納して法制度設計に係る一般理論を構築し、問題に当該理論を適用すること

が刺激的であり、本学の講義の中で最も思い出深い講義であった。現在、私が消費者庁に勤務し、消費者法制の企画立案業務に従事しているのは、平井先生の指導により法制度設計に関心を持った影響が大きい。「法政策学」の一般理論は、一法案立案担当者が仕事をする上でも、有力な視座を与えてくださっているのを実感している。

## 2. 教育者としての平井先生

平井先生が「法律家」（議論により問題解決をする者）の教育という観点を意識されて体系書や論文を執筆されていたのは周知のとおりである。その観点は講義においても徹底されていた。身近な例を挙げると、平井先生は、講義をする際、原則として板書や図解をしない。これは議論により問題解決をする者である「法律家」の最大の武器が「言語」を操る能力であり、「法律家」は「言語」能力に優れている必要があるため、講義をする際には「言語」により「明晰」に説明を行わなければならないというお考えによるためであると思われる。「言語」はCrystal-Clearでなくてはならないと先生が度々お話しされていた。そのため、私は、「法政策学」の演習の報告を行ったときや研究室にいる平井先生に質問をしにいくとき、その報告や質問に「言語」の「明晰」さが求められ、緊張したのを覚えているが、他方で、明晰かつ論理的な説明や文章が明晰な思考力と厳密な論理構成力を生み出すこととなることも体感させていただいたのである。学生時代に「言語」の重要性を認識できたことは「法律家」になろうとする者にとって得難きことであった。

## 3. 私の中で生き続ける平井先生

卒業式では、当時本学の院長であった平井先生から卒業生に対し修了証が授与され、その後、平井先生から学生に対し、はなむけの言葉が送られた。私の記憶によれば次のとおりである。

「私は、法科大学院の院長という行政上の立場あるので、この場では、諸君に卒業おめでとうと言いたいと思います。しかし、これは建前であり、本心では卒業したからといっておめでたいとは思いません。約1ヶ月後に控えている司法試験に合格してもおめでたいとは思いません。皆さんはこれから法律家になるのです。法律家の能力が最も試されるときは、これまで全く議論されておらず考えた

こともない未知の法律問題にぶつかったときです。未知の法律問題を解決するには今まで培った既存の知識や経験を総動員して、筋の通った考え方とその論拠を示し、「議論」をしなくてはなりません。私は皆さんが今までの議論されたことのない未知の法律問題を解決したときにはじめて心からおめでとうと言いたいと思います。」

「そして、知識というものはすぐ陳腐化します。ですから、常に勉強するように心がけ、他の人が持っていない自分だけの陳腐化しない知恵（Wisdom）を身につけて下さい。そのためには、自らを修羅場に追い込むことが必要です。私は、大先生と論争することにより自らを修羅場に置いてきました。皆さんも自らを修羅場に追い込み、陳腐化しない知恵（Wisdom）を身につけてください。」

自ら修羅場に追い込むことを体現されている先生から上記のような言葉をいただき、感動したと共に勇気付けられたことが忘れられない。

平井先生は旅立たれた。しかし、先生の法学教育観に裏付けられた講義の様子を思い返すとき、先生の卒業式におけるはなむけの言葉を思い返すとき、そして先生の穏やかなお顔の瞳の奥に灯る情熱を思い返すとき、再び私は先生により勇気付けられるのである。